

本論文は、インド大乘仏教瑜伽行派の實踐理論の核となる「転依」(āśraya-parivṛtti/-parāvṛtti)という術語に焦点を当て、これに込められた意味、ないし意味づけの仕方の歴史的変遷を、『瑜伽師地論』をはじめとする同派の主要な文献群の精査を通して包括的に考察・分析したものである。

このテーマの研究は、1960-70年代に、高崎直道、Lambert Schmithausen、袴谷憲昭らによって大きく前進した。これを承けて論者自身も、ドイツ・ハンブルク大学留学の成果として、1990年に『瑜伽師地論』におけるその用例を詳しく検討した結果を発表し、すでに学界に一定の貢献をなしている。それによれば、『瑜伽師地論』の中には、瑜伽(yoga)を行なう修行者の心身が重苦しさ(悪)から解放されて軽快さ(善)を得るという方向で変容する、という意味をもつ最初期の転依の用例も、真如そのものが修行者のまとう偶然的な煩惱を伴う有垢の状態から解放され、無垢の状態になって顕現することを意味すると理解する、まさしく大乘的な用例も含まれているという。本論文は、この転依思想の二原型を示すとも見られる『瑜伽師地論』の研究を出発点として、瑜伽・法相系の諸文献に即して「転依」の思想の様態を克明に追跡していくのである。

第一章は「瑜伽師地論における転依思想」と名づけられ、上に触れた既発表の『瑜伽師地論』研究を再考しつつ要約し、転依思想の基盤を明示する。第二章では、無著(Asaṅga)が『瑜伽師地論』を要約して著したといわれながら、玄奘による漢訳本のみが現存する『顕揚聖教論』における転依の用例が検討される。結論的には、その用法が『瑜伽師地論』と同一線上にあることが確認されており、これは、上の伝承を補強する成果ともなっている。つづく第三章は、同じく無著の撰述とされる『阿毘達磨集論』とその安慧(Sthiramati)による注釈『阿毘達磨雜集論』に現れる転依の用例を、両者を比較しながら考察したものである。論者はここで、前者が転依思想を登場させるのはすべて修行の最終段階としての「究竟道」(niṣṭhāmārga)などに限定されるのに対して、後者は修行のプロセスに密接する転依思想を内包していることを明確に指摘している。

以下、論者は『大乘莊嚴經論』、『摂大乘論』、『中辺分別論』安慧釈、『法法性分別論』、『大乘莊嚴經論』無性(Asvabhāva)釈、同・安慧釈、『唯識三十頌』安慧釈など、主要な関係文献をほぼすべて採り上げて「転依」の用例を精査する。そして最後に、玄奘とその弟子の基の合作ともいえる法相宗の根本聖典『成唯識論』の転依思想を丹念に検討し、ここにおいて独特の形で転依思想の理論上の〈統合〉が実現していることを明らかにしている。本論文によって、おそらくもともとは素朴な瑜伽行者の精神的肉体的変化を表す概念であった「転依」が、瑜伽・法相系の流れの中で次第に真如の顕現に関わる方向に軸を移す形で大乘化しつつ、矛盾を含まない理論体系として整備されていった様相が、おおむね開示されるに至ったとあってよかろう。

細部を見れば、考察の一部に詰め不足は否めない。しかし、サンスクリット語原典、チベット語訳本、または漢訳本として現存する膨大な関係文献を一つ一つ地道に調査・解読し、転依思想の観点から唯識思想史の一面を浮き彫りにした学問上の功績は大きい。

よって本審査委員会は、結論として、本論文が博士(文学)の学位を授与するに値するものと判断する。